

■企画展示

没後200年記念 増山雪斎展

2019年4月20日[土]-6月16日[日]

観覧料:一般900(700)円／学生700(500)円／高校生以下無料

()内は前売りおよび20名以上の団体料金

●会期中のイベント

【特別講演会】

「雪斎 風雅を愛でる」

講師:山口 秦弘(三重大学教育学部教授)

5月18日[土] 14:00-15:30(13:30開場)

会場:三重県立美術館講堂／事前申込不要／聴講無料／定員150名

【ミニ・ギャラリートーク】

本展担当学芸員が、展覧会や作品の魅力についてお話をします。

5月11日[土]、6月8日[土] いずれも14:00-

事前申込不要／要観覧券／約20分

デンマーク・デザイン展

2019年7月6日[土]-9月1日[日]

観覧料:一般1,000(800)円／学生800(600)円／高校生以下無料

()内は前売りおよび20名以上の団体料金

■特集展示

中谷ミチコ展

2019年7月6日[土]-9月29日[日]

柳原義達記念館 A+B室

■常設展示

美術館のコレクション

【第Ⅰ期】2019年4月2日[火]-6月30日[日]

【第Ⅱ期】2019年7月2日[火]-9月29日[日]

柳原義達の芸術

【第Ⅰ期】2019年4月2日[火]-6月23日[日]

6月25日[火]-7月5日[金]、10月1日[火]、10月2日[水]、柳原義達記念館は展示準備のため閉室します。

三重県立美術館 Mie Prefectural Art Museum

〒514-0007 津市大谷町11

Tel: 059-227-2100 / Fax: 059-223-0570

<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>

三重県立美術館ニュース「HILL WIND 44」

発行日:2019年3月25日(禁・無断転載)

企画・編集・発行:三重県立美術館

印刷:有限会社ミフジ印刷／デザイン:豊永政史

利用のご案内

■開館時間

9:30-17:00(入館は16:30まで)

■休館日

月曜日(祝日にあたる場合は開館、翌日閉館)(5月7日[火]、7月16日[火]、8月13日[火]、9月17日[火]、9月24日[火])

※4月30日[火]は開館

■観覧料

【常設展示の場合】〈美術館のコレクション+柳原義達の芸術／特集展示〉

一般300(240)円／学生200(160)円／高校生以下無料

()内は20名以上の団体料金

※消費税率の改定に伴い、料金は変わる可能性があります。

【企画展示の場合】その都度定めます。

※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。

※障害者手帳をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。

※家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は各展覧会(企画展／常設展)の団体割引料金となります。

■メールマガジン

三重県立美術館の情報を月2回、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。詳しくは、美術館ホームページをご覧ください。

■美術館公式twitter

三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。

Follow us on Twitter @mie_kenbi

■交通

津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き(むつみ・つつじ経由)」、「夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分

※できる限り公共交通機関をご利用ください



■「三重県立美術館友の会」へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、美術散歩等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

○年会費:一般会員 3,000円(入会金 500円)／ペア会員 5,000円(入会金 1,000円)

○特典:会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、レストラン・ミュージアムショップご利用割引等。

詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL. 059-227-2232)までお問い合わせください。

■「公益財団法人 三重県立美術館協力会賛助会員」へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

○会費:年間一口 法人 50,000円／個人 25,000円／準会員 10,000円

○特典:展覧会ならびにレセプションへの招待、各展覧会のカタログ贈呈(準会員は半額)等。

詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL. 059-227-2232)までお問い合わせください。



MIE
PREFECTURAL
ART MUSEUM
NEWS

三重県立美術館ニュース

鈴村麻里子（編）

はじめに

中高生は、アイデンティティや人間関係に悩む多感な年齢層であるにもかかわらず、一般には博物館にアクセスしづらい層であるとされる¹。三重県立美術館の場合も、たしかに彼らの姿を展示室で見かけることは稀だが、教育普及担当者にとって、中高生のうち中学生は比較的実態を把握しやすい年齢層と言えるかもしれない。なぜなら、当館においては、中学校団体の来館頻度は他の校種と比較すると高いからである²。さらに、中学生の「職場体験」の対応が仕事の一定の割合を占めることも、その大きな理由として挙げられる。

1. 職場体験の流れ

そもそも職場体験とは何だろう。文部科学省のホームページ「中学校職場体験ガイド」によると、職場体験とは「生徒が事業所などの職場で働くことを通じて、職業や仕事の実について体験したり、働く人々と接したりする学習活動」であり、その教育的意義として「望ましい勤労観、職業観の育成」や「学ぶこと、働くことの意義の理解、及びその関連性の把握」等が挙げられている³。一方で、事業所「実習先のこと」にとっての受入の意義は、「次代を担う人材育成」「地域における企業価値の高揚」「職場の活性化」等であるという⁴。この職場体験ガイドでも事業所例として美術館の名前が挙げられているから⁵、受入を行っている館は全国的に見ても多いのだろう。実際、同業者の集まりでも職場体験の対応についてはしばしば話題に上る。

ここ数年、当館に受入依頼のあった津市内の中学校に対しては、概ね以下のよう流れで対応を行っている。対象生徒は中学校2年生で、事前・事後学習を除く在館日数はほぼ全校3日間(9:30-15:00)、時期は9月である⁶。当館にとってこの受入は、学校との連携や中学生との交流が実現する貴重な機会であるため、日程重複時に各校の人数制限は行うが、現状では特に事情がない限り受入そのものは断らない方針を探っている。

1) 3月頃～6月頃 受入依頼

各校から館に届く調査用紙に、受入可否、受入可能日時⁷・人数等の必要事項を記入し回答する。人数の連絡に関しては4月下旬以降に行う。

2) 4月下旬以降 各校へ受入可能人数の連絡

津市教育委員会の担当課に、近隣の学校の実習日程を確認する。日程の重複を考慮しながら各校へ2名～5名の受入許可連絡を行う。

3) 6月～7月 各校の実習生徒確定、実習生徒についての聞き取り

生徒の希望や、事業所の受入上限人数をもとに校内で調整がなされた後、担当の先生から参加生徒確定の報告を受ける。その際、実習予定の生徒について先生からヒアリングを行い、4の予約電話や5の事前訪問の日程を調整する。

4) 7月～8月 各校の実習生徒の代表による予約電話

決められた日時に、各校の実習予定生徒の1名が美術館に電話をかけ、5の事前訪問の日程調整をする。この時、美術館の場所(はじめて来る生徒が多い)や駐輪場、インフォメーションの場所等を伝える。

5) 8月～9月 各校の実習生徒全員による事前訪問

4の電話で予約された日時に、各校の実習生全員が来館する。実習時間や当日の服装、気をつけるべきこと、持ち物等を説明し、控室や職員通用口を案内する。予約時間が重なった場合は、複数校合同で事前訪問の対応をする。生徒から「自己紹介カード」が提出

される場合もある。

6) 9月 職場体験実習

2018年度の場合、9月5日(水)～7日(金)は1校3名、9月11日(火)～13日(木)は4校7名、12日(水)～14日(金)は3校6名、19日(水)～21日(金)は2校10名の生徒の対応を行った。活動の詳細については、「2. 実習内容」を参照のこと。

7) 9月～10月 フィードバック(礼状受取、アンケート回答)

各校から届くアンケートに回答する。質問は、子どもたちの取り組む姿は積極的だったか、働くことの厳しさや大変さに触れることができたか、人数や日数は適当だったか、等。

また、実習後には生徒一人ひとりによる礼状が、学校から美術館に送付される。文中で、印象に残ったできごとに触れる生徒も多く、参加生徒個人からフィードバックを得る良い機会となっている。

8) 10月頃 成果発表

文化祭等で職場体験の成果が学校で発表される。市内の中学校で開かれた発表会への出席が今年度はじめて叶い、実習で生徒が何を得たのか、生徒の口から美術館がどのように紹介されるのか、ほかの事業所ではどのような実習が行われているのか知る機会を得た⁸。生徒の発表を聞き、美術館での体験が予想以上に生徒に大きく響いている、という実感を得られた。

2. 実習内容

現在当館では、以下の活動を組み合わせてプログラムを構成している⁹。複数校が同一日程で実習に参加する場合は、合同で活動をすることもあれば、グループに分かれて活動を行う場合もある。近年は学芸普及課の職員1名(* インタビュー参照)が、プログラムの立案から館内の調整、各校との調整にいたるまでの業務の大部分を担っており、生徒対応については主に他の担当職員2名(編集を含む)と分担しながら行っている。

◎…実施頻度が高い ○…時折行う △…めったに行わない

1) 1日目

◎ガイダンスと館内案内 ※終日

3日間美術館スタッフの一員として働いてもらうために、当館の活動について説明し、展示室やバックヤード(収蔵庫含む)の案内をする。展示室での鑑賞、発表や意見交換も行う。日程の都合上、2日目にこの活動を行う場合もある。

2) 2日目、3日目の活動

◎監視・受付 ※以下、いずれも1～2時間程度

監視スタッフの配置場所を20～30分間隔で移動しながら、受付や監視の体験を行う。

◎チラシ等の整理

展覧会チラシ等の印刷物を会期別、地域別に整理する。

◎メールマガジン執筆・編集

「特命編集部員」として同マガジンの執筆や編集を手掛ける。

○鑑賞支援教材「アートカードみえ」やワークシートの整理

鑑賞支援ツールとは何か、どのように使うかという説明や実践も含む。

○ボランティア活動

ボランティアが行う活動を一緒に行う。インフォメーションでの来館者対応、新聞の切り抜き等。

△屋外彫刻の洗浄

条件が揃えば、半日程度洗浄を体験してもらうこともある。

△学校団体案内

タイミングが合い、来館団体から許可が下りれば団体案内の体験も行う。

◆その他、実習時に、館で起こっていることに関する活動等

3. 課題と展望

2で挙げた実習項目のレパートリーはそれなりに豊富だと感じられるかもしれないが、調整や準備が滞りなく進むことは少ない。夏前から9月の館内の状況を予想しつつ何とか彼らの仕事を捻出している、というのが実際のところである。

本稿の準備にあたって、文科省や自治体のホームページ等での学習のねらいを見直したことは、受入側のメリットの再確認につながった。学

習機会を提供することにとどまらず、(たとえ「結果的に」であっても)美術館の活性化や活動改善も積極的に追求していくべきかもしれない。

2018年3月に編者が参加した全国美術館会議の第32回学芸員研修会でも、利用者とのコミュニケーションの検討において、「中学生」からの情報収集や彼らによる評価が非常に有用であると考えさせられる機会が幾度もあった¹⁰。これからの当館と中学生の関係を考える上で、アドバイザー、パートナーとしての中学生という発想は大きなヒントとなるように感じる。

細かい課題を挙げ始めればきりがないが、実習内容の充実も目指しつつ、職場体験の成果を美術館、地域やほかの利用者に広く還元する方法を模索していかたい。

*職場体験担当者へのインタビュー

以下は、現在当館で職場体験の主担当を務める学芸普及課の藪沙織へのインタビュー(聞き手:鈴村)である。

1. ご自身の中学生時代について教えてください。

先生に反抗ばかりしている子どもでした(笑)。美術館や美術作品に興味を持ち出したのはちょうどこの頃です。きっかけは1冊の本でした。国語の先生の勧めで読書をするようになり、その頃読んでいた小説が映画化もされ、小説、映画ともにその世界観がとても好きでした。映画のほうで美術館が少しだけ登場します。このとき「美術館は素敵な場所」とインプットされ、憧れる場所になりました。

2. これまでの職場体験の対応で印象に残っていることは?

ある生徒が体験学習の最終日に心の内を話してくれたことがあります。それが一番印象に残っています。美術館職員の私にそんなことを話してくれるのかという内容でした。その頃の職場体験学習は受入数が現在よりも少なく、生徒との時間がもっと密でした。とはいっても、わずかな時間の中で心を開いてくれたことに単純に嬉しくも思いましたし、その後の中学生との関わり方への参考になりました。私自身が勉強になった体験です。

3. 中学生とのやりとりにおいて、とくに気をつけていることは?

体験内容などは中学生ということを意識して考えていますが、体験学習が始まってからは「中学生だから」という接し方はしないようにして

います。働く現場であることを実感してもらいたいのです。

4. 3日間の実習を美術館で体験した生徒が、その後、どうなるとどのようなことをしてくれると良いなと思っていますか?

美術館での3日間が何かしらのきっかけになら素敵だなと思っています。体験した内容を忘れてしまっても構いません。美術館、美術作品から派生して、生徒たちの世界が広がれば嬉しい思います。かつて中学生だった私が1冊の小説から美術館や美術作品に興味を持つたようにです。

5. 8年間職場体験に関わってきて、最初の頃と今を比べて、職場体験のシステムや学校、生徒あるいは自分自身の変化を感じることはありますか?あれば具体的に教えてください。

最初は担当学芸員のお手伝い程度でした。いつしか積極的に関わるようになります。そうなると私自身にも欲が出てきます。「もっと、こうしたい」という欲です。ですが現実とのはざ間で、また自分の立場からも限界を感じることがたくさんあります。中学2年生の恒例行事として惰性で行うのではなく、もっと有意義な学習にしていくのが理想ではないかと個人的にはそう考えています。まだいろいろな可能性がある学習だと思います。

6. 当館では、中学生の職場体験学習の受入だけでなく、高校生の現場体験学習やインターンシップ、大学生の博物館実習の受入も行っている。

7. 実習日程(3日間)はあらかじめ各校が決めており、事業所はそのうち何日の実習実施が可能な回答する。

8. 津市立東橋内中学校から「職場体験学習発表会」(2018年9月27日)の案内状をいただき、同校にお邪魔した。事業所や保護者の参観が可能になっており40名の生徒が3グループに分かれ、模造紙やパワーポイントを使いながら、生徒が一人ひとり職場体験で学んだことを皆の前で発表していた。出席者には生徒による「〇〇新聞」(〇〇には事業所名等が入る)をまとめた冊子が配布された。

9. 過去の対応については下条子「美術館のウラオモテ～職場体験の実際と課題」『Hill Wind』11号、2006年、6ページを参照のこと。本記事はウェブ版の閲覧も可能。
<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/54526037602.htm>
 (2019年1月16日閲覧)

10. 例えば、中学生に展示や補助ツール(パネル等)についての助言をもらい、それを展示改善に反映する(吉田憲司氏による全体講演より)、大人向けに文章を執筆するときは中学生に狙いを定めて執筆するくらいがちょうどいい(岩田一成氏による第3分科会での発言より)等。

昭和前半期の日本にみる北欧とデンマークのデザイン

高曾 由子

今年の夏、三重県立美術館では、デンマークのデザインに焦点をあてた巡回展「デンマーク・デザイン展」を開催する予定です。同国は北ヨーロッパに位置し、バルト海と北海に面した半島と島々から成る国。職人技の長い伝統を有し、近代化以降も手仕事に基づく家具や製品の生産に重点を置いてきました。このたびの展覧会では、日本でもよく知られるロイヤルコペンハーゲンの磁器から、20世紀の名作家具、現代の製品を展示し、同国の大歴史と魅力を紹介する予定です。

2000年代中頃より始まり、いまも長い盛り上がりを見せる「北欧ブーム」。2006年にスウェーデン発祥の家具メーカーIKEAが日本に進出し、フィンランドを舞台とした映画「かもめ食堂」で色鮮やかなMarimekkoの衣装に注目が集まつてから、10年余りが経ちました。今日では、「北欧風」という言葉が魅力的なデザインをあらわすものとして定着し、北欧の文化はますますなじみ深いものとなっています。

しかし、日本における北欧のデザインへの高い関心は、近年に始まるものではありません。その家具や陶器については、戦後より長く愛されてきた歴史を有しています。北欧モダンが戦後日本デザインの思想的原型となったことは、出原栄一氏によって指摘されてきましたが¹、ここでは、展覧会に先立ち、近代から戦後における日本人デザイナーたちと北欧、デンマークの関わりを辿り、その魅力を知る一助としたいと思います。

デンマークの家具生産の近代化において、その礎を築いた作家としては、コーオ・クリントが知られます。クリントは1924年に新設された王立芸術アカデミー建築科の家具コースの責任者を務め、後にこれが家具科に独立した際には、初代教授として後進の指導にあたりました。彼の家具制作と教育は、①人間工学をとりいれた設計、②過去の優れた家具をもとにこれを改良する手法を特徴とするもので、ハンス・ヴィーイナ（ウェグナー）や、アーネ・ヤコブセン（アルネ・ヤコブセン）をはじめとする、のちにデンマークを代表することになる次世代の作家に大きな影響を与えた。高い技術と人間的なあたたかみを感じさせる造形は、1950年代のアメリカを中心として世界的な人気を博すようになります。

日本において北欧のデザインが注目されるのは戦後になってからのことでしたが、日本人工芸家たちによる北欧調査は、すでに戦前より行われていました。といっても、ここで注目されたのはいわゆる北欧モダンとは少し異なるもので、1929年にスウェーデンを訪れた思想家柳宗悦、陶芸家濱田庄司らが感銘を受けたのは、スカンセン野外博物館の古い民具の展示でした。また、1937年には、漆芸家山崎覚太郎が商工省嘱託のもと北欧諸国を視察しますが、ここでも山崎が称賛するのはスウェーデン、オレフォスの「純粹美術的」なガラス製品です。山崎はノルウェーのほかデンマークにも立ち寄り、ロイヤルコペンハーゲン、ユースト・アンデルセンの鉄物を視察していますが、その評価は芳しくなく、山崎は伝統的な意匠に「徒らに過去の名声に泳いで居る形体」²を感じ、同じ意匠を描き続ける絵付職人たちを批判的、同情的に眺めました。この北欧評価の背景には、山崎自身が東京美術学校出身の美術家意識の強い作家であったことが関係しているようですが、この視察を通じ、山崎が手工艺の機械化を進める日本に比して、北欧を含む歐州に手工艺の尊重という傾向を指摘していることは興味深いところです。

漆芸家の山崎がデンマーク工芸界に停滞を感じた一方で、1931年には日本でドイツの建築雑誌「Bauwelt」を読んでいた建築批評家の小池新二が、フィンランドの建築家アルヴァ・アアルトの出現に深い衝撃を受けていました。今日では「北欧の賢人」として名高いアアルトですが、1937年のバ

リ万国博覧会ではフィンランド館を手掛け、1938年のニューヨークの近代美術館(MoMA)で個展が開かれるなど、1930年代は彼が国際的な躍進を果たした時期でした。

小池は早くも1938年、MoMAの図録をもとに日本にアアルトの紹介を行いましたが³、ここで注目すべきは、小池がアアルトの登場に近代建築の新たな展開と進歩を見ていたことでしょう。小池は、1920年代、 Bauhausに始まり、欧洲に広く伝播した建築様式を「戦闘的」な「国際建築」であったと振り返りつつ、近年は「鉄と硝子の世界」から「木材の時代」、「手工藝の復興」へと向かう、思いもよらぬ展開があらわれているといいます。

「最近の新建築は、先駆者的新機軸から、十分に消化された境地へと進んできた。露骨な機能主義の清算、従来古いものとして顧みられなかつたものの再認識、幾何学的純粹形態に対する有機的直線の採用、そこに作家の個性や民族の特質や風土の特性が現れてくるのは、当然なことであつた。」(図1)

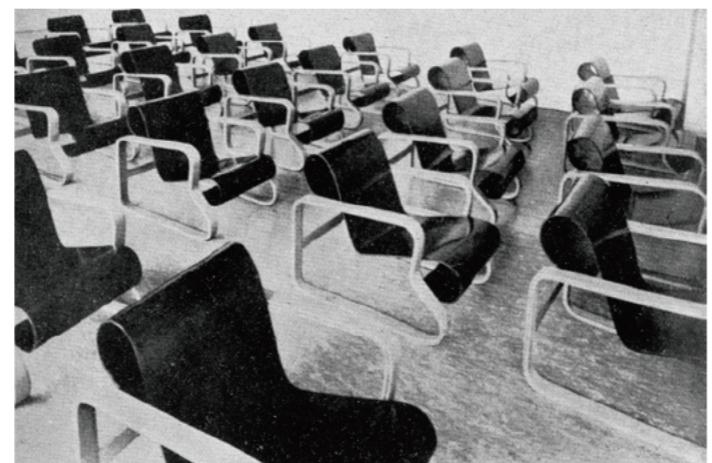


図1

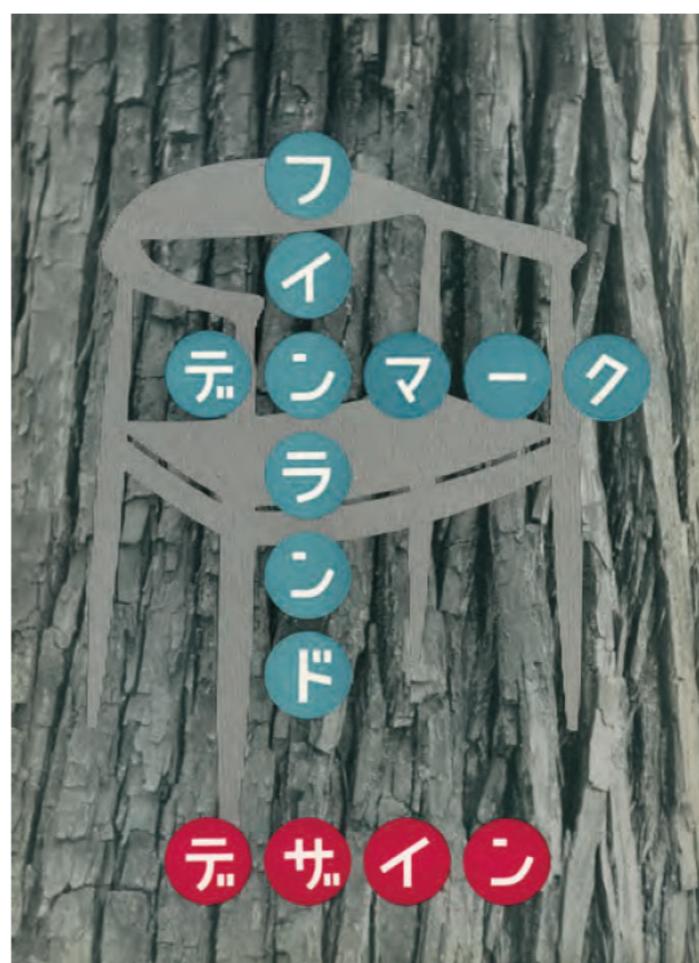


図2

「何よりも人間的なその美しさ。国籍の如何を問わず手にとり、使いたくなるような本物のもの…。異国趣味とか、骨董趣味とか、貴重珍奇とかそんなものではなく土地に根ざしたほんもの。」

剣持はスウェーデン工芸には人間的な美しさがあるといい、そこに国際的に受け入れられる普遍性と独自の民族性を見出しました。デンマークの家具についても同様であるとしながら、その手工性、特にフィン・ユールの家具を評価しています。ここで北欧モダンを手本に剣持が説くのは、「伝統」のデザインは、特定の装飾様式に依ってではなく、地域に根差した技術、材料の採用や、機能効果の検討から実現するということでした。

時を同じくして、北欧工芸に注目した日本人には、民芸派の作家が挙げられるでしょう。1958年に日本民芸協会の主催によって開催された「フィンランド・デンマーク・デザイン」展(図2)においては、デザイナーの柳宗理、古仁所智が実地調査のなかで蒐集した「新しい工芸」が展示即売されました。中にはカイ・フランクの陶磁器やアアルト、ヴィーイナ、ヤコブセンらの家具が含まれ、北欧モダンのそうそうたる顔ぶれが揃ったことがわかります⁷。

展覧会に際して柳が執筆した解説文⁸からは、彼の興味がその造形のみならず、低廉な素材の活用、量産のための製造術にあったことがうがえます。「機械時代の今日、機械の効果を利用する製品は、第一に大量に作れないし、又物を正確に作ることができない」、「機械製品であるが、クラフトマンシップを確りと身に備えて製造していることは、日本の安っぽい機械製品と較べ全く対照的」と述べるように、柳は北欧工芸に

おける機械と手工の併用を評価しました⁹。同展では、アアルトの曲木家具の隣に民族衣装が並べられ(図3)、前近代民具からの手工性の継承を強調した展示がなされました。

陶芸家濱田庄司は、同展に際し、北欧の工芸についてこう述べます。「こちから見ると、それがやはり非常に伝統的に見える。向うは伝統的でないという。それは形の上で習慣的に伝承されているものはないかも知れないが、底にほんとうの伝統が流れているんですよ。僕らはそれを伝統と呼びたいのです。」¹⁰

ここで伝統とは、もはや具体的な造形や技法、作家の意思に依るものではありません。機械化とモダニズムのなかにも「伝統」があらわれるという思考こそ、日本人デザイナーたちが北欧デザインから得たものであつたといえます。



図3

図1 「アアルトの椅子」(小池新二「汎美計画」より)

図2 「フィンランド・デンマーク・デザイン」展図録表紙。

木の表皮の写真にヴィーイナ《椅子JH503(ザ・チェア)》のシルエットが浮かぶ。

図3 「フィンランド・デンマーク展」展示風景(『民藝』67号、1958年より)

1. 出原栄一「日本のデザイン運動 インダストリアルデザインの系譜 増補版」ペリカン社、1992年、173 - 179頁。

2. 山崎覚太郎「瑞典・諾威・丁抹に於ける工芸事情」「工芸ニュース」、6巻6号、1937年。及び山崎覚太郎「海外工芸の新傾向」日本輸出工芸連合会刊、1937年、65 - 80頁。

3. 小池新二「汎美計画」(アトリエ社、1943年)所収「アアルトに就いて」。初出は「建築知識」4号8巻、1938年。

4. 「アルヴァ・アアルト もうひとつの自然」展図録、国書刊行会、2018年。

5. Mark Mussari, *Danish Modern: Between Art and Design*, BLOOMSBURY, 2016.

6. 「工芸ニュース」22巻9号、1954年所収。

7. 「フィンランド・デンマーク・デザイン」展図録、日本民芸協会、1958年。

8. 柳宗理「フィンランド・デンマークの工芸」「民藝」66号、1958年。

9. 藤崎圭一郎氏は北欧デザインに機械と手工艺の融合を見出す見方がこの当時の日本で支配的なものであったことを指摘しています。「北欧モダン デザイン&クラフト」展図録、アートインター・ショナル、2007年、188 - 195頁。

10. 訂7より「座談会 フィンランド・デンマークの工芸」



図1 工部美術学校素描
図2 岸田劉生《天地創造より(石を噛む人)》、1914年

先の「川端康成と横光利一展」(2018年10月27日-12月16日)は、川端の美術コレクションだけでなく、川端が収集した浅草その他での見世物興行のチラシや、知人から受け取った書簡を数多く見ることができ、改めて川端の興味の在処を知ることができた。川端の作品や人物像の理解を助ける資料に接することができるは、川端が「捨てない人」だったからだ。そういう点では、師である曾山幸彦がわずか30歳代前半で亡くなった際、塾生で分け合ったと言われる曾山が学んだ工部美術学校時代の絵画教師カペレッティや生徒の木炭画等(図1)が、同じ「捨てない人」だった中澤弘光宅の自宅から発見されたことも吉報で、ご遺族を通して先日当館に寄贈された。さらには、春陽会入会以来の師、木村荘八の面倒を最後までみた中谷泰のアトリエからも、多くの資料の中から先日岸田劉生の銅版画3点(図2)が見つかり、昨年そのまま寄贈を受けることができた。捨てることが現代人の美德のように捉えられる今日、多少傷みがあっても不要と思わずに残してくれた作家とご遺族には感謝の気持ちしかない。

美術館にこうした資料が集積しつつあるのは当館に限ったことではない。近代関係の資料は世代交代が進み、相談が以前よりも増えている。各美術館は、日常業務の合間に縫って、保管のための空間をやりくりしながらアーカイブ化をすすめ、資料がより活かされる道を探っている。近年、関連資料を含んだ立体的な展示が各地で増えてきたのはその成果であろう。

一方で、美術館等で抱えるには限界があり、受け入れる余裕がないけれども価値を有している資料が世の中には数多くある。現在は、まだその価値が理解されていないものもあるだろう。そうした資料も、破棄や紛失から免れれば、後に時代の証言となる場合がある。自分や先祖が集めた資料はなるべく捨てずに持っていてほしいものである。

とはいものの、個人で保管していくには、悩ましい点がいくつかある。収納場所の確保もさることながら、カビや虫の害等から如何に守っていくかが最大の問題であろう。忙しい現代だからこそ、比較的手間がかからず保管するにはどうしたらよいのか。



田中 善明

先ず、カビの害を少なくするには、ポイントが二つある。その一つは、湿気の影響を受けにくくすることである。低い位置は湿気が溜まりやすいからなるべく高い所が望ましく、一階よりも二階(ただし、高温にならない場所)、平屋であれば高い位置で、しかも結露の心配があるので外壁付近ではなく外気の影響を受けにくい場所に保管する。そして保管場所に簀の子等を敷いて下からの空気の流通も確保。正倉院は理想的な保管庫だとよく言われるが、その庫内では足のついた辛檀に収納されているがために、宝物が外気の影響をより受けにくい構造になっていたと指摘されている。私たちの家ではなかなかそうした環境を整備するのは難しいので、せめて押入れであれば上の段に収納し、時折入れた箱の蓋を開けて空気を入れ替える程度でもかなり違うだろう。そして、もう一つのポイントは、資料にホコリが被らないよう清潔を保つことである。ホコリは湿気を誘引するだけでなくカビの栄養になることから、資料に付くホコリは掃除機や刷毛でこまめに取り払う方がよい。ゆっくりとでも空気が流れているほうが、カビの着床を防ぐことができるとのことで、そういう環境にあるところを保管場所するのが望ましいが、自宅を留守にしていることが多い場合は、常時換気のできる換気扇を取り付け、空気の通り道をつくることも現代では可能になった。筆者も自宅で高気密性のジュラルミンケースに収納したまま数年放置した結果、革製のレンズ袋にカビを発生させてしまったので、偉そうなことは言えない。乾燥剤を入れ、数か月に1度でも天気の良い日に定期的に点検するべきであった。

三重県は特に高温多湿でモノが腐りやすいと言われることがある。よく言えば、それだけ分解する力が強く作物の生産に適した場所だということであるが、緑が多いので湿気が保たれやすく、資料の保管にとっては他の地域よりも気を配る必要がある。

それでもモノである以上、傷んでしまうのは仕方がない。もし、それが希少だと思われる資料であるならば、劣化することを承知のうえで、「断捨離」ではなく資料と上手に関わり、生活していく道を探りたい。

柳原義達と陶芸② —ことばについて—

太田 智子

前回の掲載で柳原義達の作陶について言及したが、今回は陶芸に関する柳原のことばについてご紹介したい。数回にわたって、彫刻家柳原の陶芸に関する数少ない文章について、当時の柳原の活動や彫刻界の状況などを踏まえながら見ていきたい。

現在確認できる柳原の陶芸に関する発言は、1964年夏に開催された「現代国際陶芸展」の展評で、同年10月号の「芸術新潮」に掲載された。

この展覧会は、同年に開かれる東京オリンピックを記念して開催された、日本で最初の国際的な陶芸の展示であった。同時代の陶芸が世界中から集まり、日本を代表する陶芸家の作品とあわせて紹介された。東京会場を皮切りに久留米、京都、名古屋へと巡回¹。展示を主導した陶磁学者・陶芸家の小山富士夫氏によれば、1950年代後半から、世界的に国際陶芸展が開催されるようになってきていたが、海を渡る日本での開催は輸送コストが高く、破損の危険性があったため、この展覧会はそれらの困難を乗り越えたものであったという。また出品作品については、小山氏が加藤土師萌氏や濱田庄司氏らの助言をもとに、短期間ではあったが世界中を歩き回り選んだという。

展覧会主催者たちは「わが国に精新的な刺激をもたらすとともに、海外でも必ず大きな反響」をよぶことを期待していただろう。これに対して、柳原はこのようなタイトルから語り始めた。「日本陶芸の敗北—現代国際陶芸展をみて—」²。いささかショッキングな導入であるが、読み進めれば、ただ痛烈な批判をしているのではないことに気づく。(つづく)

1. この「現代国際陶芸展」に関して、2017年に岐阜県現代陶芸美術館にて当時の出品作やその類似作品を、様々な記録や当時の証言などとともに再現的に展示し、1960年代の世界の陶芸や同展覧会の影響を再考する展覧会が開催された。上記の柳原の文章も取り上げられ、図録に再録されている。(2017年11月3日-2018年1月28日、於:岐阜県現代陶芸美術館)
2. 「現代国際陶芸展」図録、国立近代美術館(現・東京国立近代美術館)、1964年、3頁。
3. 柳原義達「日本陶芸の敗北—現代国際陶芸展をみて—」『芸術新潮』第178号、1964年10月、60頁。

表紙解説

「没後200年記念 増山雪斎展」より

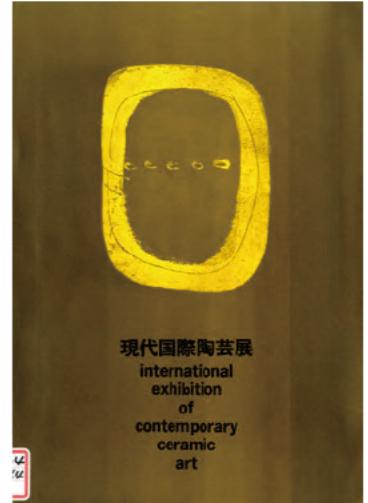
村上 敏

『虫豸帖』いわく、カブトムシの雌は黒褐色、雄は紅褐色か黒褐色。江戸時代の虫譜であれば、いずれも墨一色で塗られてしまうこともある体色の差から、飛翔する様子、腹面の構造までが、精緻に写されている。

作者は、伊勢國長島藩主・増山雪斎(1754-1819)。『虫豸帖』は、春夏秋冬の4帖からなり、およそ370枚の虫類写生図³が貼り付けられている。個々に採集の場所や日付などが記録され、これにより文化4-9年(1807-1812)頃に描かれたことがわかる。雪斎は、享和元年(1801)に致仕し、江戸に移り住んでからは、自室に終日こもり、書画に腕を振ったという。

『虫豸帖』には、翅や鱗粉の光沢を表現するため、金銀泥など高価な絵具が用いられ、写生にあたっては精度の高い天眼鏡を使ったといわれる。また、各地から標本を取り寄せるなど、致仕の殿様ならではの基盤により生まれた、最も高雅な虫譜とされる。しかし、この巧妙精緻の筆は、いわゆる「殿様芸」ではなく資料と上手に関わり、生活していく道を探りたい。

* 本草学における虫類とは、獸類、禽類、魚類、介(貝)類以外の小動物を指す。



「現代国際陶芸展」図録



掲載された柳原の文章(『芸術新潮』第178号、60頁より転載)



増山雪斎『虫豸帖』 東京国立博物館蔵、東京都指定有形文化財(表紙掲載は部分)
Image: TNM Image Archives